
西と東の架け橋

—スコット文学を輸入した人々—

佐藤 猛 郎

1. 坪内逍遙による最初の翻訳

国立国会図書館編の貴重な資料である『明治・大正・昭和 翻訳文学目録』によると、英語からの翻訳の最初は、明治4年のスマイルズ：『西国立志編』（中村敬字訳）、ピーター・パーレー：『西洋夜話』（寧静学人訳）ということになっている。いずれも当時の文明開化、西洋文化理解の路線に沿った作品である。明治5年になると、ヘボン訳『馬可伝福音書』や、デフォー：『魯敏孫全伝』（齊藤了庵訳）が登場し、翌明治6年には、『通俗 伊蘇普物語』全六冊（渡部温訳）などの教養書が出版されているが、いわゆる文学作品の翻訳は、明治8年のシェイクスピア：『葉武列士 筋書』（仮名垣魯文訳）や、明治9年のバニヤン：『天路歷程』（村上俊吉訳）あたりまで待たなくてはならない。ところが明治11年になると、西洋文学翻訳業界に一大異変が起きた。ブルワー・リットン（1803-73）：『欧州奇事 花柳春話』全5冊（丹羽純一郎訳）が大当たりをとって、次々に版を重ねるに至ったのである。リットン卿の作品は次々に翻訳され、明治12年には『人間万事金世中』（河竹新七訳）、『欧州奇話 寄想春史』全3冊（丹羽純一郎訳）、『父子奇遇 白浪艶話』（小川漁史訳）が刊行され、読書人の人気を集めていた。リットンは明治初期の読者にとって、いわば現代作家であったから、彼らにアピールするところが多かったと言えるかも知れない。坪内逍遙がウォルター・スコット作品の翻訳に手を染めたのはちょうどそのような時期だった。

坪内逍遙（本名 雄三）は美濃太田の生まれで、明治9年に東京開成学校に入学したが、同校は翌明治10年に東京大学となる。在学時代イギリス文学の世界に目を開かされ、学友達と競ってイギリス小説などを読み耽っていたという。学生時代に好んで読んでいたのは、デフォー、スコット、リットン、それにディケンズやサッカレーなどで、このころはまだシェイクスピアにはそれほど傾倒していなかったという。

逍遙が最初に発表した翻訳作品『春風情話』の刊行は明治12年だから、これは彼がまだ東京大学の学生だった頃の習作だということが分かる。これはウォルター・スコットの小説『ラマムアの花嫁』の翻案で、本来はもっと長い作品にする予定だったものが、途中で終わったものらしい。逍遙はスコットのこの作品を同級生の高田早苗に勧められ、読んでみると大変面白いので、翻訳してみようということになったとのことだ。逍遙が後に全集本につけた解説によると、翻訳に当たって、当時の翻訳ものの大部分を占めていた「漢文読み下し文」にしないで、宝井馬琴風のもっとくだけ

た「語り」の文体にしようとし心掛けたと書かれている。現代人の私どもにとって、そのどちらも読みにくいことは否めないが、逍遙の文体の方が幾分自然であることは読みとれる。その後口語体を多く取り入れた「新しい日本語の文体」を提唱した逍遙の萌芽を、この頃から読みとることができるかも知れない。

この翻訳はいわゆる逐語訳ではなく、大掴みの大意訳とでも言うべきものだ。大意訳とした理由として、逍遙は原文のままでは、

「さとりがたきふし、はたおほければ、その大意をのみ訳しとりたるものかつあり」

と書いてはいるが、ストーリーの前後関係を表す重要な部分には、

「かならず心を用いて一字一句といふともおろそかにせず。また言葉も幼童のころえやすからんをむねとしつれば、ひたすらにめやすく、耳ぢかきをえらびとった」

と述べている。

さてこの物語だが、父親の葬儀にあたり、主人公エドガーが、自分の家を破滅に追い込んだと思ひこんでいるアシュトン家に復讐を誓う第1部から、偶然の運命の悪戯でこのエドガーがアシュトン卿の娘ルーシーと出会ったことから、彼女と彼との間に愛が生まれる第4部までで、原作の約4分の1位の分量である。これを友人のついでで出版者の中島精一に持って行ったところ、表現が未熟だといろいろ手直しをされた後、友人の伯父で、当時物書きとして少しは知られていた橋頭三の名前で出版されたのが『春風情話』だった。この不思議な題名についてだが、前述のように、明治13年当時は、リットン卿の翻訳が花盛りの時期で、出版者側で翻訳作品が当たるには「花」「春」「柳」などの言葉を題名につけなくては駄目だと固く信じていたためだとのことだ。面白いのは、登場人物の名前ががすべて日本語風に変えられていることで、「威童荊烏林」(エドガル・レベンスウード)、「瑠紫阿朱遁」(ルシー・アシュトン)、「令門土」(レイモンド)といった具合だ。また挿し絵の服装がまったく日本の歌舞伎調で、男子も女子も鬘を着けているのはどうしたことだろうか。

それにつけても、逍遙が当時読んでいた多くの小説の中で、何故とくに『ラママアの花嫁』に感激し、翻訳したいと思ったのか、という点に興味がかきたてられる。逍遙自身は何も言っていないが、この点について、私がオレゴン大学のスコット・コンファランスで口頭発表した折り、シカゴ大学のジェイムズ・チャンドラー博士が面白い意見を聞かせてくれた。逍遙は後にシェイクスピアの専門家として日本を代表する学者となるわけだが、スコットの諸作品のなかでも、特に作者が意識的に、一瞬の劇的緊張感を強調している『ラママアの花嫁』の演劇性に、彼はある種の靈感を得たのではないだろうか、というのである。このドラマ性というものに青年逍遙が強く惹かれたという説にはなかなかの説得力がある。彼はその後の生涯を通して、演劇人であり続け、日本の近代演劇運動の父と呼ばれるに至ったのだから。

次のスコット作品の翻訳は明治14年(1881)の「春江奇縁」で、高田早苗訳の3巻本である。(実は高田が35%、逍遙が残りの65%を翻訳)「江」の字からも推定できるように、*The Lady of the Lake*の翻訳だ。この作品はその後『湖上の美人』という題名で日本の読者に大いに親しまれるようになる。これはスコットの長編詩の3番目で、スコットランドの美しいハイランドを舞台として、美しい女主人公を中心に、恋あり、活劇あり、美しい自然描写あり、ハイランドの珍しい風俗紹介あり

の中世絵巻で、スコットランドばかりでなく、全世界で愛読されていた。これも逍遙が東京大学の学生だった頃の習作だが、原作の詩を散文体に翻訳してはいるものの、原作をかなり忠実に翻訳した作品ということができる。しかし学生の翻訳ということもあって結局このままでは出版できず、残念ながら未刊に終わっている。

この未刊原稿に日の目を見させてくれたのは当背中堅どころの翻訳家服部撫松（誠一）で、服部は逍遙・高田による訳業にいろいろ手を加えた上、物語の主人公に当たるマルカム（翻訳ではマルゴム）の父の無念の失脚、マルカムの生い立ち、彼の出奔のくだりなど、作品全体で20回で構成されているところの、最初の6回を付け加えている。つまり第7回になって初めて原作冒頭の有名な一節、

「暮煙全ク収マッテ一痕ノ名月グレンナルトネーノ林頭ニ懸リ、四顧人無フシテ溪谷間寂水風力軟カニシテ、玉兎波ニ躍ル、一頭ノ美鹿アリ、ヨウヨウ鳴キ来テモナンノ清流ニ臨ミ、頭ヲ低レテ水ヲ飲ミ、一睡以テ昼間ノ勞ヲ慰セントス。」

の名調子が出て来るという設定になっている。当然これ以前の6回分は原作にはなく、服部の創作ということになる。もともと原作の欠点として、主人公のマルカムの影が薄いことが挙げられ、スコット自身も「最初からマルカムはお荷物でした。恋する男などというものは、彼の恋人にとっては興味ある存在でしょうが、それ以外の人には、まったく馬鹿みたいなものですから」と述懐しているくらいだが、原作の弱点を補うとは、当時の翻訳家はなかなかやるものだという印象を受ける。しかも原作にないデロームなる人物を登場させるなど、彼がやっていることはまったく自由奔放なのである。またこの本にも挿し絵が印刷されているが、この物語の時代がジェームズ五世のスコットランドだから、16世紀なのだけれども、登場人物が着ている衣装は驚くほどモダンで、女性は明治期に流行った鹿鳴館風の夜会服のようなものを着ているし、男性は民間人の場合は山高帽を被った洋服姿、軍人の場合は日清・日露の戦いに参加した軍人のようないで立ちとなっている。

しかしとにもかくにもこの服部撫松のお陰で、逍遙・高田の翻訳は出版の運びとなる。翻訳完成から3年後の明治17年(1884)、服部誠一纂述『泰西活劇 春窓綺話』2巻本が出版元坂下半七から刊行され、翌明治18年にはこれが1巻本となって発行された。しかし我々にとって興味深いのは、当時このロマンチック物語が、政治小説として受け取られていたという事実だ。古い伝統や、昔ながらの権力や、組織を守ろうとして、事ごとに新しい国造りを妨害する勢力を、英知をもって次々に鎮撫、解消させている国王ジェームズと、彼を支持する進歩派勢力とのぶつかり合いとこの作品を解釈するとは、明治の人々の目もかなり確かなものと言うべきであろうか。最近のスコット研究の一つの行き方もこの社会史的な面を注目しているからだ。

坪内逍遙の話題から少しそれるが、明治期のスコット作品の受容に関して、政治小説、あるいは政治物語として紹介する傾向があったことを指摘しておきたい。例えば明治18年(1885)に出た横山銚呂久訳『^{スコット}寿其徳奇談』はスコットの歴史書 *Tales of a Grandfather* のマクベスの時代から、ブルース王が国家統一を果たした15世紀までを扱った抄訳だが、その序文には、スコットランド国民が、封建時代から近代国家へと移行する様と比較することによって、日本の近代化に益するようにと、この本を出した、と述べられている。

また明治19年(1886)に出た牛山鶴堂訳、『政治小説 梅蕾余薫』にも、その自序に、
「…余輩コノ頃閑ヲヌミ蘇骨土氏著ス処ノ以汎波(Ivanhoe)ト題スル小説ヲ読ムニ記事艶ニシテ
政事ト人情トヲ兼ネ加フルニ著者カ苦心ノ用意燦爛トシテ文外に溢レ抑揚アリ…」
とあるのを見れば、有名な中世絵巻の『アイバンホー』も当時の読者には政治小説と理解されていたことが分かる。スコット以外の作品に関しても、「政治小説」と銘打った作品がかなりあることから、当時の多くの読書人は西欧の政治的な葛藤や、新しい社会の誕生などに興味を持ち、当時の日本の国造りの参考としようと考えていたのであろう。

2. スコット作品の翻訳の記録

ここで私が調べたスコット作品翻訳の一覧表を紹介しよう。1999年8月に改訂した資料である。このうち坪内逍遙の『小説神髓』(明治21年)に関しては、一般に文学史的にはスコットの特徴を多く取り入れた作品ということになっているが、私が読んだところでは、特にそれらしい点を指摘できない。しかし伝統に従って、一応このリストに挙げておく。またこのリストは学術論文や、寄稿記事などは含まず、単行本の形で刊行されたものだけを対象にしている。

明治13年(1880)

『春風情話』スコット作・橋 頭三(坪内雄蔵)翻案・「The Bride of Lammermoor」, 中島精一・壺編

明治14年(1881)

「春江奇縁」スコット作・坪内逍遙・高田早苗訳・同人(未刊)・「The Lady of the Lake」, 3冊

明治17年(1884)

『泰西活劇 春窓綺話』スコット作・服部誠一纂述(実は、坪内逍遙, 高田早苗訳, 服部誠一監修), 坂上半七刊, 「The Lady of the Lake」, (村田良知の挿絵で1冊本が明治18年に刊行)

明治18年(1885)

『寿其徳奇談』スコット作・横山鉾呂久抄訳, 覚張栄三郎刊, 「Tales of a Grandfather」

同書は同年内田弥八刊にても発行, 附録: 日本西洋諺言比較・西洋及び東洋格言(重版あり)

明治19年(1886)

上記の再版

『政治小説 梅蕾余薫』(2冊)・牛山鶴堂訳・春陽堂刊, (2冊目は明治20年2月刊行), 「Ivanhoe」

明治21年(1888)

『小説神髓』(第一編)・スコット・坪内逍遙・女学雑誌

『作者身の上話』ウォーター・スコット・香夢楼録・我楽多文庫

(明治22年2月完結)

明治27年(1894)

『今様長歌 湖上乃美人』英人スコット・塩井雨江訳・開新堂, 「The Lady of the Lake」

明治36年2月，明治37年(1903－4)

『湖上の佳人』英文学注釈第1巻 スコット・岡村愛蔵・三省堂，「The Lady of the Lake」

明治43年(1910)

『アイバンホー』・スコット作・小原無絃訳・内外出版協会，「Ivanhoe」

大正4年(1915)

『アイヴァンホー』・大町桂月訳・植竹書院・世界名著選二編，「Ivanhoe」

『湖上の美人』・馬場睦夫訳・植竹書院・薔薇叢書六編，「The Lady of the Lake」

大正10年(1921)

『湖上の美人』・藤浪水処，馬場睦夫共訳・洛陽堂，「The Lady of the Lake」

大正14年(1925)

『湖上の美人』・幡谷正雄訳・交蘭社，「The Lady of the Lake」

大正15年(1926)

『漂白者ウイリイの物語』・柳田泉訳・近代社・世界短編小説大系

英吉利編上ノ内，「Wandering Willie's Tale・Redgauntlet」

昭和2年(1927)

『アイヴァンホー』・日高只一訳・新潮社・世界文学全集7巻，「Ivanhoe」

昭和4年(1929)

『アイヴァンホー』・日高只一訳・新潮社・世界文学全集7巻，「Ivanhoe」

昭和8年(1933)

『レディ・オブ・ザ・レイク』・木原順一訳注・外国研究社，「The Lady of the Lake」

昭和10年(1935)

『アイヴァンホー』・日高只一訳・新潮文庫，「Ivanhoe」

昭和11年(1936)

『湖の麗人』・入江直祐訳・岩波書店・岩波文庫，「The Lady of the Lake」

昭和16年(1941)

『魔鏡物語』・安藤一郎訳・河出書房・新世界文学全集21巻，「My Aunt Margaret's Mirror」

昭和17年(1942)

『運命の騎士』・浅野三郎訳・アルス・世界戦争文学全集5巻の内，「The Talisman」

昭和24年(1949)

『湖上の美人』・中村星湖訳・童話春秋社・世界名作物語，「The Lady of the Lake」

昭和25年(1950)

『覆面の王子』・高野弥一郎訳・ジープ社，「Ivanhoe」

昭和26年(1951)

『スコット編』・日高只一訳・河出書房・世界文学全集1期19世紀篇・13巻，「Ivanhoe, etc.」

昭和24年(1952)

『湖の麗人』・入江直祐訳・岩波文庫，「The Lady of the Lake」

昭和28年(1953) 6月

『覆面の騎士』・長谷川幹夫訳・黎明社・世界名作24, 「Ivanhoe」

昭和31年(1956)

『ミドロジアンの心臓』・玉木次郎訳・岩波文庫・3冊・「The Heart of Midlothian」

昭和33年(1958)

『湖上の美人』・森三千代訳・偕成社(世界名作文庫), 「The Lady of the Lake」

昭和36年(1961)

『二人の牛追い商人』・中野好夫訳・河出書房・世界文学100選, 「Two Drovers」

昭和37年(1962) 4月

『十字軍の騎士』・玉木五郎編・講談社・世界名作全集75・解説 那須辰造, 「The Talisman」

昭和39年(1964)

『アイヴァンホー』・菊池武一訳・2冊・岩波文庫, 「Ivanhoe」

『湖上の美人』・森三千代編・世界の名作5・偕成社, 「The Lady of the Lake」

昭和41年(1966)

『アイヴァンホー』・中野好夫訳・河出書房・世界文学全集グリーン版・第3集Ⅲ-9, 「Ivanhoe」

昭和45年(1970)

『ケニルワースの城』・朱牟田夏雄訳・世界文学全集デュエット版6, 集英社, 「Kenilworth」

昭和50年(1975)

『ケニルワースの城』・朱牟田夏雄訳・愛蔵版世界文学全集8・集英社

昭和53年(1978)

『春風情話』ソル・ラルタル・スコット原著・橘頭三訳・雄松堂・明治初期翻訳文学選, 「The Bride of Lammermoor」

『アボット』・古賀啓子訳・少年少女世界文学全集-国際版24巻・小学館, 「The Abbot」

『獅子王リチャード』・西村暢夫訳・少年少女世界文学全集国際版, 「Ivanhoe」

昭和54年(1979)

『モントローズ綺譚』・島村明訳・松柏社, 「A Legend of Montrose」

『ケニルワースの城』・朱牟田夏雄訳・世界文学全集16・集英社

昭和58年(1983)

『最後の吟遊詩人の歌』・佐藤猛郎訳・評論社, 「The Lay of the Last Minstrel」

昭和61年(1986)

『湖上の美人』・伊吹朝男編・小学文庫4・5年シリーズ・日本書房, 「The Lady of the Lake」

平成7年(1995) 7月

『マーミオン』・佐藤猛郎訳・成美堂, 「Marmion」

3. スコット翻訳者の横顔

スコット作品の翻訳にたずさわった人々は前項の通りだが、その翻訳者の顔ぶれがこれまた多士

濟々なので、この項では、彼らの横顔を紹介してみよう。（配列は翻訳書の刊行順にしてある）

（1）坪内逍遙（雄蔵）（1859－1935）

小説家、劇作家、文芸評論家、英文学者、翻訳家、教育者。尾張藩の美濃国加茂郡太田村（岐阜県美濃加茂市）代官所役人（維新後、帰農）坪内平右衛門と名古屋の酒造家の娘矢野民ミチとの第10子。本名勇蔵、のち雄蔵。号は春のやおぼろ、逍遙遊人。東京大学文学部政治学科および理財学科卒業。文芸的素質は主として母からうけたが、少年時、名古屋の貸本屋大野屋惣八所蔵の江戸戯作類を読破し、また、しばしば歌舞伎を見た。

東京大学で半峰高田早苗を知り、そのすすめで、英米などの西欧文学に親しんだ。在学中、スコットの『ラママの花嫁』の意識『春風情話』、明治13年(1880)などを出版し、高田らの属する改進黨系新聞に政治啓蒙の戯文を書いた。明治16年(1883)卒業と共に、東京専門学校（早稲田大学の前身）の講師となった。かたわら、在学中から研究していた『小説神髓』（1885－6）を出し、新小説の原理と作法を体系的に説いた。その理論に基づく心理的写実的小説『一読三嘆・当世書生氣質』（1885－6）などを数編書いたが、この中で、『細君』、明治22年(1889)がこの系統の作風の最高の到達を示している。また風刺的、寓意的小説もこの頃発表して、明治文壇の先駆的、代表的小説家となった。

明治24年(1891)、東京専門学校発行の「早稲田文学」を創刊、主宰して東西文明の調和を計り、明治文壇の動向を明らかにしようとした。たまたま、「しがらみ草紙」による森鷗外との間に「没理想論争」が起こり、これは記実主義（逍遙）と談理主義（鷗外）の対立と見られた。やがて、演劇改良へ向かい、『桐一葉』（1894－5）、『牧の方』（1896－7）などの実作を示した。『牧の方』に対する高山樗牛の批判から、逍遙との間に歴史劇論争がおこり、さらにのちの両者間の歴史画論争につながった。逍遙に関して忘れてならないのは演劇革新運動だろう。文芸協会（1906－13）に拠って新俳優を養成しながらの新劇運動である。シェイクスピア上演の指導もしたが、この途上で書かれた象徴劇『役の行者』（大正6年）は、日本近代戯曲中の傑作である。協会解散後も、『名残の星月夜』（大正6年）などの大作を書いて国劇の向上につとめた。

彼の生涯での大仕事は、終始研究を続けたシェイクスピアの全作翻訳で、昭和3年(1928)全40巻を完成した。この間逍遙の古希を記念して、同年、早稲田大学に演劇博物館が設置された。訳業はその後も、その死まで推敲改訳が続けられた。晩年を過ごした双柿舎（熱海市）近くの高蔵寺に葬られる。

何と言っても日本の英文学界を代表する巨人で、日本の近代演劇の父と呼ばれる存在だったが、彼の最初の文学活動がスコットの翻訳だったことはかなり意味のあることだと思う。

（2）服部誠一（撫松）（1841－1908）

福島県士族で住所は東京本郷区湯島天神1－4。明治元年に『東京繁盛記』を出版して評判となる。坪内逍遙と高田早苗の原稿、未刊の「春江奇縁」に手を入れて、『泰西活劇 春窓綺話』（スコット原作、*The Lady of the Lake*）として明治17年に出版、ロビター著『第二十世紀』を翻訳、明治19年－21年に3冊本で大阪の岡島宝文館から出版。明治29年仙台一中の漢文教師就任。

服部誠一に関してはそれ以上のことは不明だが、逍遙のデビューに力を貸してくれた人物であり、明治10年代にはかなり人に知られた翻訳家だったと思われる。

(3) 横山鉾呂久

岐阜県平民。東京芝区三田2丁目2番地、慶應義塾寄留。斑鹿狂生とも称した。横山は寄留先から推定すると、慶應義塾の研究生か、教師だったのではないかと思われるが、詳しいことは分からない。

彼が漢文くずし調で抄訳した『寿其徳奇談』には、学習院などで教鞭を執り、文部省に委嘱されて English Readers: The High School Series (全6巻) を編集した、有名な「お抱え外人」ウォルター・デニング (Walter Dening) が校閲及び序文を担当しているところを見ると、彼も当時はかなり著名な英学者だったのだろう。この作品は前述のようにスコットの歴史物語『お祖父さんの物語』の抄訳である。

(4) 牛山良助 (鶴堂, あるいは 信陽鶴堂)

長野県平民。神田区五軒町20番地, 後, 神田区末広町12番地在住。

英国, 権男爵蘇骨 (スコット) 原作, 跡部素山校閲, 『政治小説 梅蕾余薫』 (春陽堂, 明治19年, 20年, *Ivanhoe*) 訳述のほか, 次のような本を出版している。デフォー著『魯敏孫漂流記 (新訳)』 (春陽堂, 明治20年), 『英和对訳西洋落語』 (アイバンホー, ヘリック・テンプル, ロビンソン・クルーソーその他より訳編したもの, 佐藤乙三郎発行, 明治20年), 『社会小説日本之未来』 (2冊) (春陽堂, 明治20年), 『日本新世界』 {前編} (成文堂, 明治20年) など。

横山と牛山に関しては, 『国立国会図書館蔵 明治期翻訳文学書全集 明治5-38 (マイクロフィルム)』 pp. 57-64 翻訳者索引による。

(5) 塩井雨江 (1869-1913)

明治2年 (1869) 1月3日兵庫県豊岡の生まれ。大正2年 (1913) 2月1日没。詩人, 国文学者。本名正男, 別名は釣士。東大国文科在学中明治26年, 落合直文の浅香社の短歌革新運動に加わる。

翌明治27年 (1894) 英詩人スコットの長詩を, 『今様長歌 湖上之美人』の題で訳出した。明治28年に「帝国文学」が創刊され, そこに発表した七五調の創作詩「深山の美人」によって, 桂月や羽衣と並んで, 新進の擬古詩人として注目された。明治29年大学卒業後, 大学院に進み, 修辭学を学んだ。その後古典教育を通じて女性の情操の向上を計り, 大いに健筆をふるった。

明治35年 (1902) に日本女子大の教授となり, その講述をまとめた『文学研究』 (大正2年, 精美堂) や, 「女鑑」の連載稿をまとめた『新古今和歌集詳解』7巻 (明治30年-40年) が国文学者としての雨江を代表する著書である。明治44年 (1911) 彼は奈良女高師教授に任命された。

『今様長歌 湖上乃美人』は英語からの訳詩であるが, 明治27年3月, 開新堂書店から刊行された。英のサー=ウォルター=スコットの叙事詩 *The Lady of the Lake* を七五調の物語詩に訳出したもので, 美少女エレンを中心とした恋と武勇の物語。伝統的な詩情の濃い雅語麗句を用いて, スコットランドの中世的な異国情緒, 騎士道精神などを活かし, 落合直文の『孝女白菊の歌』につぐ代表的な物語詩として当時の読者に愛読された。私が所有している本はこの第8版で, 明治34年発行となっている。そしてその奥付を見ると, 毎年のように再版が出ていたのを知ることができる。

経歴から見れば分かるように、雨江は国文学者であって英文学者ではなかったのだが、天性の詩才というものは、言葉の壁をを越え、美しい詩行となって花開いたと言えるかも知れない。雨江が五七調で訳した『湖上乃美人』の冒頭部、大鹿が登場する部分を引用してみよう。

モナンの小川 風さえて 光りいざよふ 夕月夜
 かげのながる、 谷水を のみてあきたる さをしかの
 床のかなたの 森の蔭 しげるはしばみ その下に
 妻をこひつ、 ねぶるなる 夢路の末や いかならむ。

あまり忠実な訳詩とは言えないかも知れないが、原作の持つ雰囲気や、イメージを的確に描き出しているのは見事なものである。ちなみに明治27年と言えば、雨江は弱冠25才、東京大学の学生時代の訳業だった。当時の国文学学生の英語力は大したものと言えるだろう。

(6) 岡村愛蔵

三省堂書店が刊行した英文学注釈第1巻『スコット 湖上の佳人詳解』(*The Lady of the Lake*)の訳者・注釈者。三省堂、明治36年、2冊本。このほかに岡村愛蔵には『須因頓(スウィントン)氏英文学詳解』(訳注)(興文社、明治44年)がある。

三省堂に委嘱されるくらいだから、岡村氏もいずれひとかどの英学者だったと思うが、残念ながらあまり多くのことは分からない。

(7) 小原要逸(無絃)、文学士

無絃も現在あまり知られていない英学者だが、次に挙げるような訳業を見れば、恐らく明治時代の後半を代表する翻訳家だったのではないだろうか。また彼の膨大な訳業から見れば、『アイバンホー』の翻訳も、明治末期の彼の時代頃から、大意抄訳などではなく、本格的な翻訳の形をとるに至ったことが理解できる。

彼の訳業：『ロセッチの詩』(昌平堂川岡書店、明治38年)、『ユーゴの詩』(本郷書院、明治38年)、『シェレーの詩』(日高有倫堂、明治39年、英文併記)、『バーンズの詩』(日高有倫堂、明治39年)、スコット『アイバンホー』(内外出版協会、明治43年)、『ナポレオン伝』(内外出版協会、明治44年)、カーメン・シルバ著『女王と人生』訳書、(当時のルーマニア王妃の物語)、精文館、明治44年など。

(8) 大町桂月(1869-1925)

明治2年(1869)1月24日高知市に生まれる。大正14年(1925)6月10日没。詩人、随筆家、評論家。本名芳衛。桂月は故郷の月の名所桂浜にちなんだもの。大町家は土佐藩士の家柄、上京して明治義塾、独逸協会学校、第一高等中学校に学ぶかわら、杉浦重剛の称好塾に学び、巖谷小波らと交わる。

のち落合直文の知遇を得て、塩井雨江と親しくなる。明治26年東大国文科に入学、明治27年雨江の妹、長と結婚。「帝国文学」に評論、美文、新体詩などを寄稿。大学を卒業した明治29年に、雨江、武島羽衣とともに、詞華集『美文韻文花紅葉』(博文館)を出し、情熱的な美文で名声を得、大学派、赤門派などと呼ばれた。明治30年代は絶頂期で、博文館において、評論、文芸批評、紀行文などに健筆をふるい、高山樗牛と並び称された。しかし過度の酒好きのため、博文館を去り、後年

経済的には恵まれない生活の中でも、彼の才能は大いに発揮され、特に各地の山水探勝を重ねては書き綴られるおびただしい紀行文によって、その道の第一人者と目されるにいたった。彼は晩年愛していた十和田湖に近い鳶温泉で没した。

訳書として、『アイヴァンホー』のほかに、リットン卿の『ポンペイ最後の日』を植竹書院から大正4年(1915)に出している。

名文家として一世を風靡し、とくに紀行文においては現在でも各地の名所、観光地にその名を留めている桂月だが、彼も義弟の雨江と同じようにスコット文学の翻訳を手がけた。ただ彼が1916年に植竹書院から『アイヴァンホー』を翻訳したのは46才という文章家として脂ののりきった年齢ではあったろうが、すでに先行訳として小原無絃のものがあつたとは言っても、大変な労作だったろうし、彼の『ポンペイ最後の日』には非常に古い先行訳(丹羽純一郎訳『欧州奇話奇想春史』明治12年)しかなかったから、桂月の語学力はどうして大したものだったと言わざるを得ない。いずれにせよ、国文畑の桂月によるスコット作品の翻訳は、異色とすることができるだろう。

(9) 馬場睦夫

上記の大町桂月が『アイヴァンホー』を刊行した年に、同じ植竹書院から、『湖上の美人』の翻訳を出した馬場睦夫だが、彼についてもあまり良くは分からない。しかし大正期全般にわたっていろいろな翻訳に手を染めていた翻訳家で、『キプリング』(世界神話伝説大系, 13, 14)の編者になっていたり、アン・マクドネルによるイタリア童話集全35編を、世界童話大系刊行会(大正14年)から出している。また洛陽堂からは『ボードレール詩集 悪の華』(大正8年)を出すなど、フランス文学にも造詣が深かったようだ。

(10) 藤波水処(由之)

洛陽堂から、大正10年に馬場睦夫と共訳で『湖上の美人』を出した文人だが、現在ではこの人物のこともあまり分からない。しかし同じ洛陽堂から、『ハイネ評伝』などを出しているところを見ると、ドイツ文学に興味を持っていた人物かも知れない。

(11) 幡谷正雄(1897-1933)

明治30年(1897)1月20日、島根県浜田市顕正寺生まれ。昭和8年(1933)6月17日没。英文学者。

大正3年上京、早大英文科に入り、逍遙、抱月の指導を受ける。大正9年卒業、千葉師範に在職5年、辞して雑誌「文芸研究」「イギリス文学」「日本女性」を編集。

『ウイリアム・ブレイク』(新生堂, 昭和2年)と『ブレイク詩集』(新潮社, 昭和2年)が主著で、訳書にはテニスン『イーノック・アーデン』(交蘭社, 大正13年), 『バイロン詩集』(新潮社, 大正13年), 『ゲーテ小曲集』(交蘭社, 大正14年), ディケンズ作『クリスマス・カロール』(嶺光社, 大正14年), 『ボオ短編集』(新潮社, 昭和2年), ロングフェロー『イヴァンジェリン』(新潮社, 昭和9年), ほか数多い。急性肺炎のため東京杉並で没す。

(12) 柳田 泉(1894-1969)

明治27年(1894)4月27日、青森県中津軽郡豊田村(現・弘前市)に生まれる。昭和44年(1969)6月7日没。近代文学研究家、英文学者、翻訳家。東奥義塾、青森中学時代には和漢書を中心に読書に没頭。しかし中学では英語にも興味を持ち、大正3年早大文学科高等予科、大正4年同本科(英

文科)進学。増田藤之助、勝俣詮吉郎の指導を受けた。大正7年7月、「メレヂス喜劇論」を卒業論文として卒業。大正8年4月、早稲田中学に英語を教えたが半年で辞し、以後翻訳研究に専念する。ホイットマン『十一月の枝』（大正10年）、ソロー『自然人の瞑想』（大正10年）等の翻訳のほか、『カーライル全集』9冊（大正11年－昭和2年）の翻訳に着手、刊行はいずれも春秋社。大正12年関東大震災による大災害を眼前にして、歴史的文献の喪失を嘆き、明治文学研究を決意。坪内逍遙、三宅雪嶺、幸田露伴の指導のもとに、徹底した資料収集により実証的、体系的な文学研究を進めた。それが『随筆明治文学』（春秋社、昭和11年）などにまとめられた。昭和7年には、明治文学会からわかれた明治文学談話会の世話役を勤め、神崎清、土方定一、山室静、平野謙、吉田精一、らの後進の研究に指導的役割を果たす。彼の研究は、和、漢、洋にわたる学識を基盤とし、この三学の融合点を探るといのが一貫した方法だった。昭和10年以来30年にわたって、母校で教鞭をとったが、そこを去ると、また書齋の人になった。

著書：『幸田露伴』（中央公論社、昭和17年）、『田山花袋の文学』（春秋社、昭和32年）、『明治の書物・明治の人』（桃源社、昭和38年）、『小説神髓研究』（春秋社、昭和41年）など多数。

訳書：エマソン『代表的偉人論』（春秋社、昭和6年）、ミル『自由論』（春秋社、昭和10年）、ほか多数。

柳田泉と言えば、近代文学研究家の大物である。彼がいかに語学力に優れていたかは、全編スコットランド方言で書かれている『漂泊者ウィリーの物語』を翻訳したことでも判る。しかし柳田泉がスコット文学から何を学んだかはあまり分からない。

(13) 日高只一（1879－1955）

明治12年(1879)3月23日、広島県に生まれる。昭和30年(1955)1月12日没。英文学者。号未徹。

明治38年早大英文科卒。40年間早大で英文学を講じた。英米の実地見聞を下敷にした『英米文芸印象記』（新潮社、大正13年）は個性的な姿勢が知られる好著。また早くからアメリカ文学に注目し『アメリカ文学概論』（東京堂、昭和7年）の著書がある。ほかに田山花袋論や坪内逍遙論も収める『英米文学随筆』（昭和12年）などがあり、翻訳『アイヴンホー』も広く読まれた。この他彼の翻訳には、ゴールズワージー『色々の忠節』（世界戯曲全集刊行会、昭和3年）、デ・クインシー『復讐者』（新潮社、昭和4年）などがある。

日高只一は昭和初期の英文学を代表する学者で、まさに大物と呼ぶのに相応しい人物だった。彼が訳した『アイヴンホー』は評判が良く、何度も版を重ねたが、彼には『アイヴンホー』以外にも、更にスコット研究を進めて欲しかったと思わざるをえない。

(14) 入江直祐（1901－1991）

明治34年3月13日岡山県生まれ。本籍岡山県。1991年没。英文学専攻。東京大学大正13年卒。創価大学文学部教授。横浜市港北区富士塚2-24-67。訳書：テニスン『イーノック・アーデン』（岩波書店、昭和8年）『イン・メモリアム』（岩波書店、昭和9年）、『クリスチナ・ロセッツィ詩抄』（岩波書店、昭和15年）、『シェレ詩集』（新潮社、昭和16年）、『ブレイク詩集』（新潮社、昭和18年）ほか。

入江氏が昭和11年に翻訳した『湖の麗人』は、物語り部分がすべて散文体で、挿入された「吟遊

詩のミューズへの賛歌」,「バラッド」,「アベマリア」などだけが詩文体の形式で訳されている。しかし訳文自体は大変正確である。

(15) 安藤一郎 (1907-1972)

明治40年(1907)8月10日東京生まれ,昭和47年(1972)11月23日没。詩人,英米文学者。大正14年東京外語英語部入学,昭和3年卒業。高村光太郎の知遇を得る。昭和5年,処女詩集『思想以前』を出版。ジョイス,ロレンス,ウルフらの英国現代文学を紹介。昭和10年板場と志と結婚。昭和16年東京外語助教授。昭和29年ベルギー国際詩人会議に日本代表として出席,昭和38年(1963)現代詩人会会長。モダニズム系に属し,一貫して生,死,愛の人生論的,形而上の主題を追求し続けた内省的な詩人だった。

著書:『詩集 思想以前』(詩人社,昭和5年),『静なる炎』(湯川弘文社,昭和18年),『愛について』(国文社,昭和30年),『ひらいたてのひら』(昭森社,昭和38年),『夢のあいだ』(思潮社,昭和42年)など。

翻訳:ディケンズ『クリスマス・カロール』(角川書店,昭和25年),マンスフィールド『園遊会』(英宝社,昭和27年),ウルフ『ダロウェイ夫人』(河出書房,昭和31年),『スペンダー詩集』(平凡社,昭和34年),サントバーグ『シカゴ詩集』,ロレンス『愛と死の詩集』など。

研究評論:『フロスト』(昭和33年,研究社),『キーツ詩集』(新潮社,昭和44年)など。

安藤一郎氏も戦後の英米文学界で,一時代を画した文学者だった。彼が昭和16年に翻訳した『魔鏡物語』は,スコットの短編小説で,怪奇現象を題材としたものだが,珍しい作品を取り上げたものである。

(16) 浅野三郎

浅野三郎は第2次大戦中の昭和17年に,『運命の騎士』という作品を,アルス社の世界戦争文学全集第5巻に発表しているが,この他にアプトン・シンクレアの『マナサスー南北戦争』(世界戦争文学全集)も同じ全集に発表している。『運命の騎士』は翻案ものだが,スコットの『護符』(The Talisman)が原作である。

(17) 中村星湖 (1884-1974)

明治17年(1884)2月11日 山梨県南都留郡河口村(現在の河口湖町河口1080番地)に生まれる。昭和49年(1974)4月13日没。小説家。本名將為,銀漢子などの別号がある。明治37年,早稲田大学高等予科から英文科に進み,先輩の片上伸,相馬御風らの指導を得,秋田雨雀,岡村千秋,池田大伍ら級友の刺激を受ける。在学中,逍遙,抱月らの指導を受ける。明治39年,雨雀,千秋,大伍らと水明会をつくり,抱月指導のもと,バーネット夫人英訳の『獵人日記』(ツルゲーネフ)を研究する。明治40年「少年行」が「早稲田文学」の懸賞小説募集に一等当選して文名をあげた。同年7月,英文科を卒業。抱月の世話で,早稲田文学記者となり,本格的な文筆活動を始める。一方モーパッサンやフロベールらのフランス文学にも興味を持ち,これらを訳出し,各紙に評論や時評を発表した。大正4年,神奈川県生麦に移り,「生麦聖人」と呼ばれたが,彼の自然主義的穏和なヒューマニズムを裏づけるものだろう。大正5年,引退した相馬の後を受けて,早稲田文学社と文学普及会を主宰。大正5年6月,『ボブリー夫人』を早大出版部から出したが発禁処分を受ける。大正7年11

月、抱月が死に、大正8年1月に早稲田文学記者を辞した。その後は女性誌への執筆が多くなり、大正15年から、人見東明の日本女子高等学院（現昭和女子大）の教授。昭和20年、郷里河口村に疎開。昭和26年、山梨学院短大教授、昭和31年、山梨県文化功労者として表彰された。

著書：『星湖集』（東雲堂、明治43年）、『影』（今古堂、明治43年）、『漂泊』（春陽堂、大正2年）、『少年行』（植竹書院、大正4年）、など。

訳書：フロベール『ボヴァリー夫人』（早稲田大学出版部、大正5年）、フロベール『エロディアス』（白水社、大正11年）、スコット『湖上の美人』（昭和24年、童話春秋社）ほか。

中村星湖は早稲田大学の英文科出身だが、フランス文学に傾倒していた文学者で、『ボヴァリー夫人』の翻訳で発禁処分を受けたという経歴を持つ。人妻の道ならぬ恋を描いたためでもあろうが、現在の表現の自由横行時代と比べると、隔世の感を抱かないではいられない。昭和24年刊行の『湖上の美人』は山梨県に疎開中の訳業だったようだ。

(18) 高野弥一郎（1902－ ）

明治35年2月11日新潟県生まれ。本籍新潟県。新潟県長岡市滝谷町1－1845。昭和8年早稲田大卒。武蔵野音大講師。

訳書：モーガン『扉開きぬ』（蒼樹社、昭和26年）、モーロア著『フランス敗れたり』、『フランス戦線』など。

昭和25年に出版した『覆面の王子』は『アイヴァンホー』の翻案。

(19) 玉木次郎（本名 鈴木忠吾）（1901－1993）

明治34年12月13日 新潟県生まれ。平成5年没。大正12年3月中央大学法科卒。卒業後、長野、横浜、東京各地裁、東京控訴院判事等歴任、昭和21年4月以降、東京地裁刑事第2部裁判長として鏡工品公団早船事件、安楽死事件、三鷹事件等担当。昭和32年退職後弁護士を開業。著書に『幼時追憶記』、『少年時代の思い出』、『青春回想記』など。訳書に玉木次郎の筆名で、ウォーター・スコットの『ミドロジアンの心臓』全3巻（岩波文庫）がある。以上、『一裁判官の追憶』（谷沢書房、1984）のあとがきより。

玉木氏は法科出身の現役裁判官でありながら、難解で知られるスコットの『ミドロジアン』を翻訳したのだから、まさに異色の文人と言えるだろう。この作品には、同じく法律家で、民事高等裁判所の書記官をしていたスコットが、様々な法律の矛盾点を取り上げているので、玉木氏も特別の興味を持ったのだろう。訳文は立派な出来栄えになっている。

(20) 中野好夫（1906－1987）

東京大学教授、シェイクスピア研究家。サマセット・モームの翻訳を多くだし、当時を代表する英文学者だった。特に朱牟田夏雄、中野好之との共訳、ギボンの大著『ローマ帝国盛衰記』（昭和51年－平成5年）は高く評価されている。彼の流麗な訳文の美しさは有名だった。

翻訳：スウィフト『ガリヴァ旅行記』（弘文社、昭和15年）、モーム『月と六ペンス』（中央公論社、昭和15年）、コンラッド『闇の奥』（河出書房、昭和15年）、『シェイクスピア選集』（筑摩書房、昭和23年）、モーム『人間の絆』（三笠書房、昭和25年）、ステイーヴンソン作『バラントレイ家の世嗣』（河出書房、昭和26年）、D. H. ローレンス『虹』（小山書店、昭和26年）、E. M. フォースタ

ー『私は信ずる』（現代教養文庫，昭和32年），ディケンズ『デイヴィッド・カパーフィールド』（新潮社，昭和38年）など。

中野好夫氏はまさに戦後の英文学界を代表する重鎮だった。地方色が濃いスコットの短編『二人の牛追い人』を手がけたということは、彼がスコット文学の本質をかなりよく理解していたことを示している。彼の『アイヴァンホー』も名訳として評判が高かったけれども、何と云っても『アイヴァンホー』はイングランド物だし、先行訳がかなりあるので、出来ればほかのスコット作品にも取り組んで欲しかったと思う。

(21) 菊地武一（1921-1972）

明治29年3月28日(1921)香川県生まれ。本籍香川県。昭和47年(1972)4月24日，藤沢市鶴沼松ヶ岡4-3-15にて没。元國學院大教授。大正10年東京大学卒業。著書『ディ・クインシー』（研究社，昭和14年）

訳書：コナン・ドイル『シャーロック・ホームズの冒険』（岩波書店，昭和11年），『シャーロック・ホームズの回想』（岩波書店，昭和12年），『シャーロック・ホームズの帰還』（岩波書店，昭和13年），オー・ヘンリー小説集『運命の道』（改造社，昭和17年），ワイルド『ドリアン・グレイの画像』（家城書房，昭和25年），ディケンズ作『ニコラス・ニクルビー』（角川書店，昭和28年），など。

(22) 森三千代（1901-1977）

明治34年(1901)4月19日，宇治山田に生まれる。昭和52年(1977)6月29日没。詩人，小説家。女学校の教師森幹三郎の長女。東京女高師在学中に金子光晴を知り，結婚。大正14年，光晴と上海に旅行したのち，詩集『竜女のひとみ』（紅玉堂書店，昭和2年），光晴との共著『ふか沈む』（有明社，昭和2年）を出す。また彼女は大正期の女性解放思想の体得者でもあった。彼女の作品には『パリの宿』（砂子屋書房，昭和15年），『金色の伝説』（昭和17年），『豹』（昭和24年）などがあり，光晴との関係を描いた『去年の雪』（「群像」，昭和34年）も注目される。

昭和39年の『湖上の美人』は原作の翻案で，少年少女向けの読み物だった。

(23) 朱牟田夏雄（1906-1990）

明治39年(1906)6月29日福岡生まれ。平成2年(1990)没。英文学者。東京に育ち，昭和5年東大英文科卒業。戦後，東大教授，定年退職後は中央大学教授，帝京大学教授。イギリス小説，とくに18世紀小説に詳しく，多くの訳書，編著がある。

著書：評伝『フィールディング』（昭和31年，研究社）ほか。

訳書：ジョンソン『王子ラセラスの物語』（思索社，昭和23年），フィールディング『ジョウゼフ・アンドルーズ』（新月社，昭和23年）『トム・ジョウンズ』（岩波書店，昭和30年），アディスン『「スペクテーター」紙随筆選』（筑摩書房，昭和38年），スターン『紳士トリストラム・シャンディの生涯と意見』（昭和43年，筑摩書房），メレディス『エゴイスト』（岩波書店，昭和53年）など。なかでも『トリストラム・シャンディ』は，夏目漱石によっていち早く紹介された難解な英文学の名作の邦訳である。

中野好夫氏に次いで英文学界の重鎮と称された朱牟田氏が，スコットの『ケニルワースの城』を

翻訳されたことは、スコット研究家にとって大きな恩恵だった。先行訳がない作品に取り組むというのは、大変な事業となるからだ。我々は朱牟田氏の貴重な贈り物として、この翻訳を大いに活用しなくてはならない。

(24) 西村暢夫（1933－ ）

昭和8年1月8日生まれ。昭和31年東京外国語大学イタリア語科卒。現在（平成12年）株式会社「文流」取締役社長。

訳書：『レオナルド・ダ・ビンチの動物童話』（共訳）（小学館，昭和51年），『パスタ宝典』（共訳）（読売新聞社，昭和58年）ほか。（以上，『パスタ宝典』のあとがきより）

多彩な文化活動をしている西村氏の、一つの活動となっている文筆業で、『アイヴァンホー』を少年・少女向きに書き直したものが『獅子王リチャード』で、物語の中心をアイヴァンホーからリチャード王に移しているものだろう。

(25) 島村 明（1911－ ）

明治44年金沢市生まれ。昭和9年東京大学文学部英文科卒。昭和42年国立音楽大教授。昭和54年現在，中央大，鶴見大で英文学を講ず。（以上，『モンテローズ綺譚』1979のあとがきより）

スコットの小説を読むに当たって2つの壁があると言われる。1つは歴史の知識が必要なこと，もう1つはスコットランド方言のわかりにくさだ。『アイヴァンホー』に取り組んだ翻訳者が多いのは，歴史をある程度頭に入れれば，文章自体はあまり読みにくくないからではないだろうか。ところがスコットランド方言をふんだんに使った所謂スコットランド小説の場合，なかなか取り組む人が出なかったのだが，まず玉木次郎氏が『ミドロジアン的心臓』にアタックし，次に島村氏が『モンテローズ綺譚』を見事に訳し終えたのだから，スコット研究家にとって，これほど喜ばしいことはない。

(26) 佐藤猛郎（1931－ ）

昭和6年東京生まれ。昭和29年(1954)東京教育大学英文科卒業，19世紀英文学，とくにウォルター・スコット研究。佐藤猛郎はこの拙論の筆者であるが，大学2年の夏休みに原書で *Ivanhoe* を読み，その面白さに惹かれて，大学の研究室に陳列されていたスコットの作品を次々に読んでいるうちに，益々深みにはまり，いつかスコットの作品を離れては，研究生活が成立しないまでになっていた。スコット以外で筆者が一時的に傾倒し，論文を書いた作家はオスカー・ワイルドと，ジェイムズ・ジョイスだったということから類推すると，どうやら筆者の血の中にケルト的なものを無意識に求める傾向があったのかも知れない。

(27) 伊吹朝男

昭和61年(1986)に少年・少女向けに『湖上の美人』を書いたほか，子供向けの『家なき少女』の編者にもなっているが，あまり多くのことは分からない。

4. 終わりに

こうして我が国におけるスコット翻訳の歴史を辿ってみると，明治期から大正，昭和にかけて，とくにブームになることこそなかったが，スコット文学はある程度の数の読者に受け容れられて来

たことが分かる。日本人がとくに好んだのは『アイヴァンホー』と『湖上の美人』だが、スコットランドの歴史や、社会を題材とした作品となると、普通の日本の読者にはほとんど読む機会がない。スコットの作品はまず英文学専攻の研究者が読んで、その魅力を解明しなくてはならないのだが、長編物語詩8編、歴史小説27編からなる膨大な作品群を前にして、英文学者がたじたじとなったのも無理はない。先に紹介したように、日本の英文学界、文芸界を代表するような巨人達がスコットの翻訳に手を染めてはいるが、残念ながら彼らがやったことは、巨象の足を触ったり、尾に触れたりするくらいだったと言わざるを得ない。私の恩師にあたる大和資雄氏は、スコットをこよなく愛され、作品の紹介を精力的になさったが、断片的な訳業を除いて、作品全体の翻訳は残念ながら一つもない。せめて一つなりとも本の形で残して頂きたかったと、悔やむことしきりである。スコットに関する今後の訳業として、ぜひ取り上げて貰いたいのは、まず『ウェイヴァリー』、それに『ロブ・ロイ』、『聖ロウナンの泉』、『レッドゴートレット』、『僧院長』、それに逍遙が未完に終わった『ラマムアの花嫁』などで、これから育つ若い研究者に大きな期待を寄せたいと思う。(完)

(この小論は1999年7月、オレゴン大学で催された第6回国際スコット・コンファランスにおいて、筆者が“Scott in Japan”という題で口頭発表した内容と、同じく1999年10月、拓殖大学における日本カレドニア学会の全国大会のシンポジウムで、「スコットランド文学の輸入—スコットの場合」という題で話した内容をまとめ、加筆したものである)

参考書目：

国会図書館編『明治・大正・昭和 翻訳文学目録』、風間書房、昭和34年(1959)

日本の英学100年編集部編『日本の英学100年』(全4冊)、研究社、昭和43年(1968)

笠原勝朗『最新イギリス文学史年表』、コビアン書房、平成7年(1995)

The Bridge across West and East
— The People Who Introduced Scott Literature to Japan —

Takero Sato

In this paper, the writer tried to trace the footsteps of our pioneers who introduced the literature of Sir Walter Scott (1771-1832) to Japanese readers by way of translation, or adaptation. Some of them were literary or academic giants, like Shoyo Tsubouchi or Yoshio Nakano. Some of them were attracted by the dramatic elements in Scott, some of them by the political principles, and some by his poetic charm. It is remarkable *Ivanhoe* and *The Lady of the Lake* have been the favourites among the Japanese readers, but the writer hopes other significant works by Scott would be translated by future translators.

Key Words: Sir Walter Scott, *Ivanhoe*, *The Lady of the Lake*, Shoyo Tsubouchi